メキシコ協力隊活動報告

藤岡　直子
（16-1，メキシコ、養護、滋賀県立八日市養護学校）

１　配属先概要

私が活動したのは、メキシコのイダルゴ州アティタラキア市の特殊教育センター（通称ＣＡＭ）ＮＯ，２４です。この２４．というのは、イダルゴ州の中で 24 番目にできた養護学校ということです。イダルゴ州の中には、多い時で 10 名を越える協力隊員が、各市の養護学校に配属されていました。メキシコの養護学校派遣の隊員は、決して都市部の国全体のモデルになるような学校に入ったわけではなく、イダルゴ州の田舎の小規模な学校配属でした。私を含め全員が初代隊員で、協力隊やＪＩＣＡの知名度も全く無い中で、できることを手探りで始めていったのです。ゼロからのスタートでしたが、現職派遣の隊員が 16-1 の同期に数名いたことで、隊員の個々の専門性を生かして、共同で何かやれないかと当初から話し合い、任期後半のイダルゴ州の教育省を巻き込んでの『障害児教育研修会』プロジェクトにつながっていきました。

私の配属先の概要をご紹介します。首都メキシコシティからバスで 2 時間ほどのところにあるアティタラキア市にあり、児童・生徒数は約 50 名、乳幼児クラスが１クラス、学齢期のクラスが 2 クラス、教室も３つだけという、こじんまりした小さな学校です。教員配置は、校長、ソーシャルワーカー、心理士、コミュニケーション教諭、クラス担任 3 名です。日本にはない専門職の配置もあり、一見進んでいるように思われますが、その専門性には大きな疑問を持ちます。しかし、メキシコでは大学を出ているだけでも価値があるので、専門職の教員は特にプライドが高いように思います。

子どもたちの障害は、知的障害、聴覚障害、視覚障害、肢体不自由などで、その程度もさまざまです。メキシコでは、まだ聴覚障害・視覚障害の子どもたちへ専門的な指導を行えるところがほとんどなく、知的障害の子どもたちと同じクラスの中で学ぶしかない現状があります。特に聴覚障害の子どもたちに、適切なコミュニケーション指導が行えないことが、私の大きな悩みでした。各クラス担任は 10 名を越えるバラバラな発達段階と障害の子どもたちを見なくてはならないため、個々の子どもに応じた指導は何にもできていない状況でした。授業といえば、教科書のイラストを切ってノートに貼る、が中心で、教師が教科書を読むのを子どもは聞いているだけなど、活動らしい活動もないまま、日が終わってしまいます。チャイムもならず、時間割も授業の区切りもなく、何の勉強をしているのやら？生徒もわからないまま、教室にいるだけの状態です。また、教師は生活面での指導はほとんど行わず、子どもが排泄に失敗しても、親が迎えに来る

までそのままに放置するようなこともありました。学校の現状がそうなので、障害の重い子どもたちほど、学校に来られなくなってしまいます。バスを乗り継いで、遠くからやってくる子どもも多い中、保護者があきらめてしまえば、自主退学となります。授業料はかかりませんが、毎日のように紙や絵の具が必要で、学校の諸経費が保護者には大きな負担であり、また、通うための交通費や、障害が重い子どもの場合は母親がつきそわねばならないなどの事情が、子どもの就学を困難にします。

２　学校における活動内容

そうした学校の現状を見る中、赴任当初から、私には「すぐにでも何か子どもたちのために始めたい！」思いで、着任 2 週間後には、体育の授業を持たせてもらうことから活動を開始しました。先生たちの授業を見ながら、子どもたちにとって意欲を持てる活動、自分で考えることのできる活動、体を動かす活動が足りないと考えたので、スペイン語が不十分な中でもやれる体育からとりかかることにしたのです。始めた当初は、集団の活動をほとんど経験していない子どもたちは、集中できずバラバラに走っていってしまったり、説明を聞けなかったり、また手伝ってくれるべき担任が、授業中に携帯メールに夢中、木陰に休みに行ってしまったり…などなど、なかなか困難な状況でした。教材も道具も十分になく、授業内容には工夫が必要でした。廃材を利用して体育活動に使える道具を作ったり、手作り大型カルタなど、教材を工夫したりしながら、各クラス週二回ずつの体育をやっていく中で、「ナオの授業は楽しい！」と、まず、子どもたちが感じてくれるようになり、同僚たちが認めてくれるようになり、状況が改善されていきました。

体育の授業の成功を足がかりに、学校での活動を広げていき、音楽や図工などの科目、また日本の朝の会の活動を紹介しながら、子どもたちが使える教材作りなどへ活動を広げていきました。実際のところ、私の学校での活動時間は、・体育（３クラス週 2 時間）・図工および音楽　（３クラス週１時間）　・個別の指導〔毎日 2 時間〔肢体不自由児の個別指導 2 名〕　・朝の活動の実施（毎日 1 時間）に加え、生徒が多すぎて指導困難なクラスにサポートで入ったりもしたので、私の学校でのもち時間は増え、休憩する暇もないほど、忙しいものになっていきました。増えすぎたもち時間を整理するため、「ナオの時間割表」作成し、同僚たちに配布しました。私の授業の時間を知らせて時間を区切る必要があったからですが、これが、学校全体に浸透し、先生たちもなんとなく時間割を意識して授業を予定してくれるようになっていったことは思わぬ効果でした。また、自分の授業のため、たくさんの教材を作成しましたが、その教材を授業の中で使って子どもと活動し、子どもが楽しんでやる姿を先生たちに見てもらえたことで、先生たちの私に対する意識も少しずつ変化していきました。「ナオは、アイディアをたくさん持っているみたいね」「ナオの授業を子どもたちが喜んでいるわ」など、私の活動に対して理解してくれることにつながりました。体育や音楽の授業をするとき、私はいつも担任に入ってくれるようにお願いをしていたのですが、最初はただ教室にいてくれるだけだった

先生たちも、少しずつ、体育の活動を子どもと一緒に楽しんでくれたり、教材を使うところを見にきてくれたりと、私に対して好意的に協力してくれるようになりました。

３　イダルゴ州の隊員による、障害児教育研修会プロジェクト

最初にも触れましたが、イダルゴ州内の養護学校には、１０名を超える隊員が配属され、そのうち２名は現職参加の養護学校の教員でした。メキシコの障害児教育の現状に対して、私たちの力を合わせて何かできないかと話し合い、それぞれの任地で培ってきた実践を持ち寄って、メキシコの先生たちへの「障害児教育研修会」やろうということになりました。隊員の職種は、体育や音楽、算数教育に詳しい隊員や、美術の隊員もいて、それぞれの活動を合わせると、大変内容豊かな実践がありました。それらを生かしたい、という思いと、個々の力では、まだ、協力隊員から何かを学んでいこうという意識の薄いメキシコの中では、同僚たちの授業に意見したりすること難しいので、研修会をすることで、もっと多くの知識を伝えられる機会になるのではないか、という思いもありました。研修会の内容は、私たちにとっては不利なスペイン語になってしまうので、実技を中心にして、実際に授業で使える活動のアイディアを、たくさん得てもらえるようなものにしたいと考えました。研修会の内容は算数や美術、音楽、の教科のほか、私が担当したのは、体育実技や教材のアイディアの紹介でした。特に体育の実技では、今まで体育の授業を自身も受けたことが無い先生たちが、楽しみながら、布バルーンを使った活動や、大縄跳び、リレー、カルタ競争、などの体育活動に取り組んでくれ、「とっても楽しかった」「是非授業で使いたい！」と喜んでくれました。メキシコの先生たちが、自分の学校に帰って、子どもたちとの授業を楽しく、内容豊かなものにしてもらえたら、と私たちが心がけたことは、「知識を教える」、ではなく、「私たちが持っているものを知ってもらう」スタンスで、自分たちの授業を紹介する中で、使えそうなところを持ち帰ってもらえたら・・という姿勢を持つことでした。プライドの高い先生たちを相手に、まだ若い私たちが、「現状はひどい。授業を改善せねば！」と非難したところで、受け入れられません。実際のメキシコの中での生活を通して学んだことは、相手の側に立って考え、相手にとって受け入れられるやり方で、活動を進めていくことでした。

研修会は、アトトニルコ市、アティタラキア市、トゥランシンゴ市、ティサユカ市、プログレッソ市、の各隊員の学校で行い、その地域の先生たちを３０名～５０名集めて行いました。各地で大変好評で、好意的な感想が寄せられました。また、研修会の中には、イダルゴ州教育省の関係者から依頼を受けて、イダルゴ州ＵＰＮ大学で日本の障害児教育を紹介したものもありました。大学での講演に当たっては、現職教員２名が、自分たちの日本での勤務校の授業の様子のビデオや写真、教育課程の説明を中心に、日本の障害児教育の現状の紹介をやりました。日本の教育システム及び社会福祉システムの障害にまで及ぶものとなり、準備はなかなか大変だったのですが、スペイン語が及ばない部分は、ビデオや写真を多用し、実際に見てもらうことで、学生さんたちの関心を高めることができました。「日本の障害児教育の到達レベルはすばらしい」「もっと学びた

い」「自閉症児の教育方法をもっと見たい」など関心は高く、将来養護学校の教員となる学生さんたちに、日本のモデルを知ってもらえたことは、大きな意味のあることだったと私たちもやりがいを感じました。

こうした研修会を通して作成した隊員たちのスペイン語資料をそのままにしておくのはもったいない、と最終的には、冊子（カラー）にまとめ、イダルゴ州内のすべての養護学校に配布しました。具体的な授業の指導案をつけ、写真を多用してわかりやすくすることを心がけたので、同僚たちにプレゼントしたときはとても好評でした。今後、イダルゴの州内で使われることを願っています。

④　活動を終えるにあたって

忙しく駆け抜けた、１年９ヶ月を過ぎ、帰国の時がきました。学校では、私のために盛大なお別れ会を開いてくれました。保護者が一人一品持ち寄って、テーブルの上にはたくさんのごちそうが並びました。子どもたちがナオのために、と出し物を準備してくれたのですが、それらはすべて「ナオが教えてくれたこと」シリーズだったのです。リトミックやピアニカ、道具を使ったダンスなど、今まで私が授業でやってきたことを、先生たちが指導して見せてくれたのです。「ナオががんばって教えてくれこと、私たちが続けていくわよ」そういってくれた同僚たち。うれしくて涙がこぼれました。長い間自分は、孤軍奮闘、子どものためにと思ってやってきたけれど、実はメキシコの同僚たちや子どもたち、その保護者と、多くの人々に理解され、受け入れられ、支えられていたのだと気づきました。メキシコでの経験を通して学んだことは数え切れないほど。大きく成長させてもらった協力隊での２年間でした。

ありがとうメキシコ！

報告の最後に、メキシコへの感謝の言葉で締めくくりたいと思います。

Grasias! Mexico!(グラシアス　メヒコ！)